

故竹内貴一郎先生について

原 敬

(大学工学部教授)

早いもので、竹内貴一郎先生がご永眠されてから満二年を迎えようとしている。先生の訃報に接したのは昭和五十八年二月六日、昨日までの大学院博士前期課程の修士論文の諮問も終り一息ついた日曜日の午後であった。丁度一週間程前に吉川進三先生とご一詣にお見舞に行き、先生とお話をしてきたばかりであり、まさかと大変驚いたことであつた。

竹内先生に最初にお目にかかったのは、私が同志社大学へ奉職した昭和四十四年四月であった。実に大柄な堂々とした先生である。私の研究室が先生の研究室の隣であつた関係もあり、それ以後約十四年間、先生が海外留学された一年間を除いて、ほとんど毎日顔を見合わせ、公私共に大変お世話になつた。

埼玉県の御出身でしたが、幼小の頃から大阪にお住まいで、同志社工業専門学校、同志社大学工学部機械科をそれぞれ卒業され、引続き慶応義塾大学大学院工学研究科へお進みになり、慶応義塾大学より昭和三十八年三月工学博士の学位を授与されている。一方、昭和三十年御結婚、一男一女に恵まれ、京都大学工学研究所助手(文部教官)を経て、昭

和三十九年四月より母校の同志社大学工学部機械科にお戻りになられ、昭和四十九年四月から大学院工学研究科教授として教育・研究に従事された。また、昭和五十七年四月より社団法人自動車技術会評議員としても活躍された。先生のご専門分野は内燃機関であつた。燃料の噴霧液滴を従来の方法と異なる非接触法により写真撮影することに昭和四十三年頃にご成功され、この非接触撮影技術に端を発し、近年、社会問題になつている自動車の排気ガスの浄化、燃料の問題に興味をもたれた。そしてエンジン内での燃焼機構の解明のため、レーザー分光法による予混合火炎中の温度分布および化学種濃度分布の測定方法の確立、高温高圧下での噴霧燃料の燃焼の解析、ディーゼル噴霧の微粒化、高温壁面に衝突した微小液滴の変形挙動の熱移動等について非常に詳細に研究されていた。さらにガソリンの代替の基礎研究として、アルコール系、プロパンを燃料とした燃焼特性に関する種々の研究もされていた。これらの研究の一端は昭和五十二年頃より次々と公表され、国内外から注目を受けてつあり、先生のご他界は大変惜しまれる。おそらく先生ご自身も



さぞかしご無念でなかったかとお察しする。しかし先生が永年にわたりお蒔きになられたこれら色々な研究の種は、お弟子さん達に受けつがれ、多く芽をふき出し花が咲き始めようとしている。きっと先生も天国でお喜びになっただらう。

このような研究をされていた先生の一日の多くは、講武館にある先生の実験室で、ゼミ生の指導と研究でありました。ときにはエンジンの騒音を避けてか、実験室前の屋外でゼミ生にご指示されてもいた。また先生は学生の卒業後のことも考えて、欠席・遅刻はかなり厳しく学生を戒っていた。一方、ご自身に対してもそうであった。昭和五十五年頃から体調をくずされ、検査・治療のため何回か入院されたが、学生の休暇期をできる限り利用し、また、講義だけに来られたりしていたのは、その一つの現われであらう。

ところで先生はあの大きい体に似合わず、なかなかの運動神経の持主であったように思う。それは先生が海外留学される一年位前に先生のゼミと私のゼミでソフトボールの試合をしたが、先生は投げてはスピードとコントロールがあり、かつ巧打者で驚かされたから

である。また先生は酒類の名柄にお詳しく、おいしいワインをよく教えて頂いた。さらに、京都は勿論、その他いくつかの都市・地方の庶民的でうまい食べ物屋も実によくご存知で、出張したときなどに幾度かご一語させて頂いたことも大変懐かしく思い出される。

最後の方になったが、先生は工学部移転の際には、教育、研究の諸条件が充分整えられるべきであるということをお願いして、工学部部門改善委員会の委員を積極的にお引き受けになり、精力的に色々な調査および計画案作りをされていた。もし先生がご存命ならば、きっと移転についての諸問題の検討に関与していたであらう。

機械系学科には竹内先生に対して私より旧知の諸先生方、また多数の竹内ゼミ卒業生が居られるのに、このような段片的で取留もないことを書き、申訳なく思うが、研究室が先生の隣であったことから筆をとった次第である。先生の三回忌にあたり、ご冥福をお祈りする。